

# 教職実践演習における大学生の省察に関する研究 —中大連携による放課後学習支援の実践デザインの変遷から—

大内里紗 (東京学芸大学大学院連合)

キーワード: 教職実践演習, 学習環境デザイン, 中大連携

## 問題と目的

中央教育審議会(2006)は, 教職課程のカリキュラムに「教職実践演習」を新設・必修化することを決めた。この科目は学生が教員になる際の課題の自覚及び不足している知識や技能の補完・定着を図ることを目的としている。実施する大学側に対しては, 「理論と実践の有機的な統合」を図ることが求められており実際の教育現場と関わりながら学生に省察を促すような授業方法を模索する必要性が指摘された。

しかし, 実践に参加する学生の省察の質の確保(森下ら, 2011)や教育現場と大学の連携(麻生, 2016)には多くの課題があることが報告されている。また, 大内(2018)は実践を行う当事者である学生自身が現場のニーズに応じてより良い実践形態について検討し, 実際に活動しながら改善を加えていくことができる実践環境デザインの検討が必要であると述べている。

そこで本研究では大内(2018)の研究を引き継ぎ, 教員養成系 A 大学が「教職実践演習」の中で実施する放課後学習支援において, 縦断的に学生の省察を収集・分析することで大学生の省察の特徴及び教育現場と大学の連携を支える実践環境デザインを検討することを目的とする。

## 方 法

### 実践について

本研究は国立教員養成系 A 大学が 4 年次後期に開講する「教職実践演習」のうち心理学科の公立 B 中学校における放課後学習支援の実践を対象とした。実践は 2015 年から 2019 年までに毎年度一定期間ずつ行われ, その内容は一般生徒に対する放課後学習支援を主としている。実践形式は, 2017 年までは前年度の反省をもとに年度ごとに変更していた(大内, 2018)が, 2018 年度以降は一定である。以下 Table 1 に 2018 年度以降の実施日, 実践形式を示す。また, いずれの年度も中学校と共同で事前指導・事後指導を行なった。

Table 1 放課後学習支援の実施日及び実施形式

|         | 実施日                     | 学生数  | 実施形式                   |
|---------|-------------------------|------|------------------------|
| 2018 年度 | 9/27~11/14<br>までに 11 日間 | 37 名 | ・希望者の予約制<br>(飛び込み参加可)  |
| 2019 年度 | 11/1~12/6<br>までに 10 日間  | 33 名 | ・原則 3 年生のみ<br>・1 時間で実施 |

### 調査方法について

大内(2018)をもとに改訂した学生用「振り返りノート」を用意し, 実践前後にグループで相談しながら記入するよう求めた。改訂前後の変更点及び記入内容を以下 Table 2 に示す。また, あらかじめ前年度以前の「振り返りノート」を学生が閲覧できる状態にしておき, 実践や目標の設定に役立てるようにと指示をした。

Table 2 振り返りノートの変更点及び記入内容

|     | 記入単位             | 記入内容                                                                                                                                                                       |
|-----|------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 改訂前 | 個人               | <ul style="list-style-type: none"> <li>・本日の取り組み</li> <li>・気がついたこと</li> <li>・生徒の様子</li> <li>・困ったこと, 申し送り事項</li> </ul>                                                       |
| 改訂後 | 担当日の同じ<br>学生グループ | <ul style="list-style-type: none"> <li>・実践時の目標と工夫</li> <li>・学習内容</li> <li>・生徒の様子</li> <li>・よくできたこと</li> <li>・困ったこと, 改善点</li> <li>・目標への反省</li> <li>・中学校教員からのコメント</li> </ul> |

## 結果と考察

### 結果の処理

大内(2018)が分析対象とした 2015 年から 2017 年までの実践を第 1 期, 今回分析対象とした 2018 年から 2019 年までの実践を第 2 期とする。第 1 期の記述と比較するため, 第 2 期の「振り返りノート」のうち生徒の様子と困ったこと・改善点についてテキストマイニングを実施した。分析には KHCoder-3b01a-を使用した。分析に際して事前に前処理を行い, 語の抽出および取捨選択をした。この時, 同一のものを表す単語は一語に統一した(例:「子」と「生徒」を「生徒」に統一)。

### 結果と考察

テキストマイニングの結果から, 生徒の様子では生徒(n=48), 多い(n=12), 教える(n=8), 積極的(n=8)といった語が多く抽出された。これは「積極的に勉強する生徒が多く, 教えやすかった」という記述に代表され, 中学生の集中力や参加率の低さに関する記述の多かった第 1 期と比べて第 2 期の学生の方が意欲の高さを感じていたことが示唆された。困ったこと・改善点では生徒(n=27), 教える(n=10), 声かけ(n=7), といった語が多く抽出された。これは「教え方が難しかった。ペース配分や声かけの仕方にも工夫が必要だと思った」という記述に代表され, 机の配置など物理的な学習環境に関する記述の多かった第 1 期と比べて第 2 期の学生の方が生徒と実際のやりとりに関する問題について省察できていたことが示唆された。

改訂後の「振り返りノート」では事前に実践時の目標と工夫, 事後に中学校教員からのコメントを記入する必要があった。そのため, 前年度以前の記録も含めて自らの担当日より前の記録を積極的に参照する必然性があったと考えられる。第 2 期の「振り返りノート」は実践に参加した学生が積み重ねられた記録を利用してより良い実践を目指すことのできるデザインの一助となったと考えられる。